



平凡であること ~戦後80年に想う~

戦後80年を迎え、夏休み中のテレビや新聞等では、戦争の惨禍に改めて目を向け、戦後の日本の歩みを見つめ直し、私たちの向かう未来について考えるきっかけとなるような番組や報道が多く見られました。戦争という残酷で悲惨な人間の行為により、愛する人を失った方々の悲しみや苦しみは想像を絶するものであり、察することもできません。海原純子さん(白鷗大学教授)のエッセーを紹介します。

私が中学1年になった年、親戚の結婚式があり、父がスピーチすることになった。私も大人の仲間入りということで、初めて宴に招かれた。その親戚は一族の中でも出世頭で、新郎の父親は一部上場企業の管理職をしており、重役を目指して出世街道を進んでいた。その披露宴で父はこんな話をした。

人生の幸せは平凡であることです。特に何も変わったことが無い平々凡々とした生活を馬鹿にしてはいけないよ、出世や名声を求めるより大事なことがある。

聞き様によっては嫌味にもとれる内容だが、父のその時の真剣さは、まだ子どもの私にも胸にずしりと響くものがあった。華々しい席でスピーチした父を見たのは、この時一度きりだ。

若い頃は地位や名声を目指すもの。父の言う「特に変わったことの無い平々凡々な生活」が、消極的に感じられることもあった。

父は喉頭ガンが全身に転移して平成二年に亡くなった。自分が死んでから読むように、と私は一冊のノートを渡された。父が亡くなってすぐにはそれを開く気にはなれず、半年たって私はノートを開いた。そして初めて父がヒロシマを体験したことを知った。原爆投下直後にヒロシマに入り、そこでボランティア活動をしたために二次被爆し、それがきっかけで体調を崩し結核になったことも知った。それは父だけの秘密で、母さえ知らない事実だった。

そうか、私はすべてのことがつながり合点があった。父は地獄を見てきたのだ。語るには辛すぎるそれを心にしまい込み、ただ特別のことがない平凡な中の幸せを伝えたかったのだろう。

「変わったことが無い、というのは幸せなことなんだよ」

父のその時の声は、今でも耳に残っている。

何気ない平凡な日々が何と幸せで有り難いことか。戦後80年に関する報道に接し、改めて平和の大切さについて考え、代り映えのない日常生活に幸せを感じました。

この夏、記録的な大雨により熊本県などの九州地方や北陸、東北北部では甚大な被害を受けました。被災された方々や被災地に一日も早く平凡な日常と安寧が訪れることを祈っています。

PTA奉仕作業(8月23日)ありがとうございました!

早朝より大勢の保護者の皆様にご協力をいただき、校庭や花壇、校舎周辺の除草や側溝の清掃等を行っていただきました。お陰様で気持ちよく2学期の教育活動を行うことができます。除草していただいた校庭では、町陸上記録会に向けて、先週から5・6年生が出場種目を決めるための記録測定を行っています。

紙上にて改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

写真は、除草していただいた校庭で陸上練習に取り組む5・6年生の様子です。

